

令和4年産 コメ通信

第1号（令和4年3月11日）

【発行】

北秋田地域振興局農林部農業振興普及課
（電話0186-62-1835）

適切な種子予措で健苗を目指して！

1 播種準備

田植え予定日と苗の種類から育苗日数を逆算し、播種量と播種日を決定します。

1) 高温登熟に対応した田植え時期

管内におけるあきたこまちの田植え時期（中苗）の目安は、5月15～20日頃となります。
（好適出穂期が8月4～9日であり、この時期に出穂させるため）

2) 播種量と育苗日数

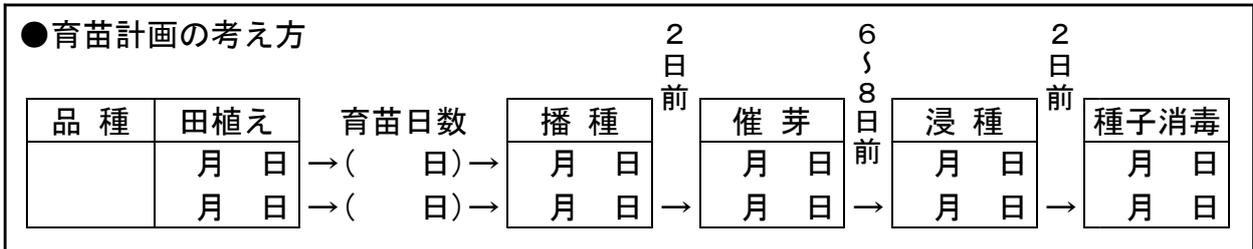
近年は、中苗と稚苗の中間の播種量（110～160g）で播種している例が多く見られます。

播種量が稚苗に近いにもかかわらず、育苗日数は中苗に合わせている場合もあるので、老化苗にならないよう育苗日数に気をつけましょう。

●育苗の目安（70株/坪植）

	中苗	稚苗
播種量(乾籾)	100g/箱	180g/箱
育苗日数	35日	25日
葉数	3.5葉	2.5葉
草丈	13～15cm	10～13cm
使用箱数/10a	27箱	20箱

●育苗計画の考え方

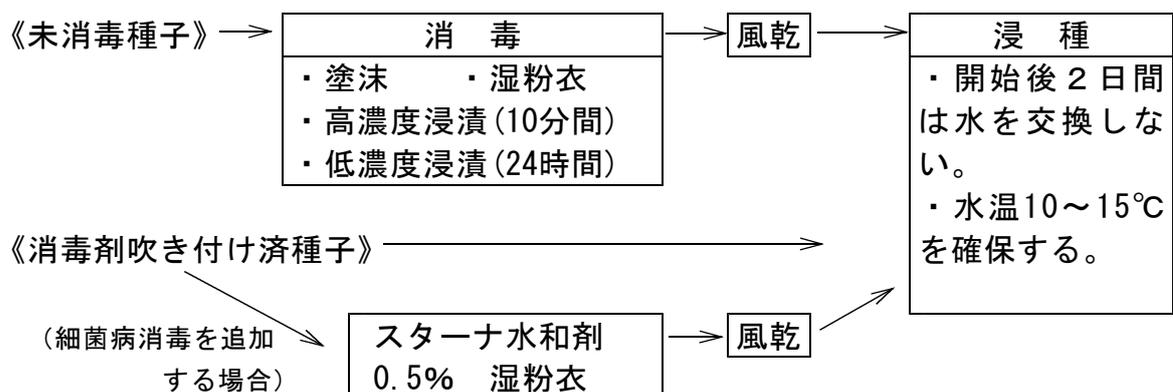


2 種子消毒と浸種・催芽作業

1) 種子消毒～浸種作業の流れと注意点

ばか苗病やもみ枯れ細菌病等防除のため、消毒、浸種の注意点を再確認しましょう。

①作業の流れ ※採種ほ産種子は、塩水選の必要はありません



※種子袋への入れすぎに注意（袋の50～60%程度）

②注意点

【作業環境】

- ・周辺からの病原菌の侵入を防ぐため、種子予措を行う作業場所やその周辺を十分に清掃します。また、浸種・催芽時は容器にふたをします。
- ・浸種、催芽に使用する機器・容器は、使用前及び品種や防除方法が変わる毎に十分洗浄します。
- ・複数の品種や消毒方法の異なる種子は、同じ容器で浸種・催芽しません。また、採種ほ産種子とそれ以外の種子も、同じ容器で一緒に浸種・催芽しません。

【消毒時】

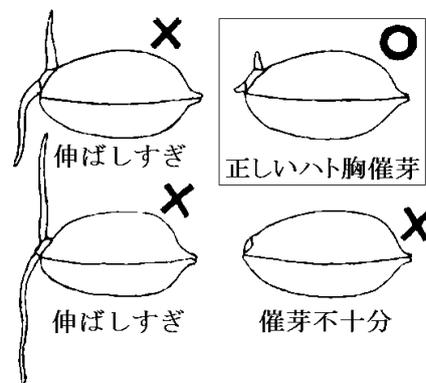
- ・浸漬法により種子消毒を行う場合は、防除効果を高めるため薬液の温度は10～15℃になるようにします。浸漬開始時は水温が15℃になるようお湯で調整します。
- ・薬剤の効果安定・向上を図るため、いずれの消毒方法も、処理後に必ず風乾します。

【浸種】

- ・浸種の水量は、種子容量の2倍程度（種籾1kg当たり水量3.5L）とします。
- ・10℃以下の水温で浸種すると種子の休眠が深まったり、種子消毒の薬効を不安定にさせます。浸種温度は10～15℃を確保するように努めましょう。
- ・浸種期間は浸種水温10℃で6日間程度とし、種子消毒剤の安定した薬効を確保するため水交換は2～3回とします。また、浸種開始から2日間は、種子消毒の効果を高めるため、種子袋を揺すったり、水の交換をしません。
- ・浸種終了の目安は、籾殻を透かして胚が白く見えるようになった時です。
- ・水温を確保するため、できるだけ屋内で浸種します。

2) 催芽のポイント

- ・袋内部の種子まで均一な温度になるよう、催芽前に36～40℃の温水で湯通しを行います。
- ・催芽は、30～32℃の温度で行います。芽の長さはハト胸程度（催芽長1mm）とし、伸ばしすぎると損傷が多くなるので、芽の長さに注意しましょう。
- ・年により休眠性には差があります。本年は、昨年的高温登熟の影響で種子の休眠が深い可能性があります。催芽時間や水温に注意して適切な管理を行って下さい。



3) その他

- ・生物農薬（タフブロック、エコホープDJ）を使用する場合、ヘルシード剤、テクリード剤、スポルタック剤との体系処理、ダコニール・ダコレート・ベンレート剤の播種時処理は、生物農薬の防除効果が低下するため行いません（ただし、スポルタック剤はタフブロックとの体系処理が可能）。

3 播種作業

1) 床土などの準備

- ・床土の酸度はpH5前後とします。pHが適正でない場合、苗立枯病が発生しやすくなるので注意しましょう。
- ・床土にタチガレエースM粉剤を混和する場合は、作業時期に注意しましょう（4苗立枯病の防除対策を参照）。

- ・ 苗箱と苗床に隙間があると、箱内が乾燥しやすくなり、苗の不揃いや苗の葉ヤケの原因となるので、苗床は均平にして苗箱を密着させるようにします。

2) 播種時の注意

- ・ 播種機で作業を始める前に、播種量の確認を行い、適量の種が落ちるように調整します。
- ・ 播種時のかん水が不十分だと出芽不良につながるなので、十分にかん水を行います。

4 苗立枯病の防除対策

使用時期	薬剤名	希釈倍数	箱当たり散布量	苗立枯病菌の種類					
				ピシウム菌	フザリウム菌	リゾープス菌	トリコデルマ菌	リゾクトニア菌	白絹病菌
播種前	オラクル粉剤	—	10～15g	○					
	タチガレースM粉剤	—	6～8g	○	○				
	ナエファイン粉剤	—	6～8g	○	○	○			
播種時	オラクル顆粒水和剤	4,000倍	500ml	○					
		8,000倍	1,000ml						
	ダコニール1000	500～1,000倍	500ml			○			
	ダコレート水和剤	400～600倍			○	○	○		
	タチガレースM液剤	1,000倍	500ml	○	○				
		2,000倍	1,000ml						
	ナエファインフロアブル	1,000倍	500ml	○	○	○			
		2,000倍	1,000ml						
	ヘッド顆粒水和剤	500倍	500ml	○					
		1,000倍	1,000ml						
	ベンレート水和剤	500倍	500ml				○		
		1,000倍	1,000ml						
ランマンフロアブル	1,000倍	500ml	○						
タチガレースM液剤	500倍		○	○					
	1,000倍		○						
バリダシン液剤5	1,000倍						○	○	
ランマンフロアブル	1,000倍		○						

- ・ タチガレースM粉剤は、播種時にダコニール1000またはダコレート水和剤をかん注する場合、播種5日前までに床土に混和します。
- ・ 床土にタチガレースM粉剤、オラクル粉剤またはナエファイン粉剤を使用しなかった場合は、オラクル顆粒水和剤(播種時)、タチガレースM液剤(播種時または発芽後)、ナエファインフロアブル(播種時)、ヘッド顆粒水和剤(播種時)、ランマンフロアブル(播種時または発芽後)のいずれかをかん注します。
- ・ タチガレースM液剤とダコレート水和剤の播種時同時かん注は薬害が発生することがあるため避けます。
- ・ ベンレート水和剤の播種時使用は、いもち病の育苗期防除も兼ねます。
- ・ ナエファインフロアブル、ランマンフロアブルの使用時期は緑化始期までです。

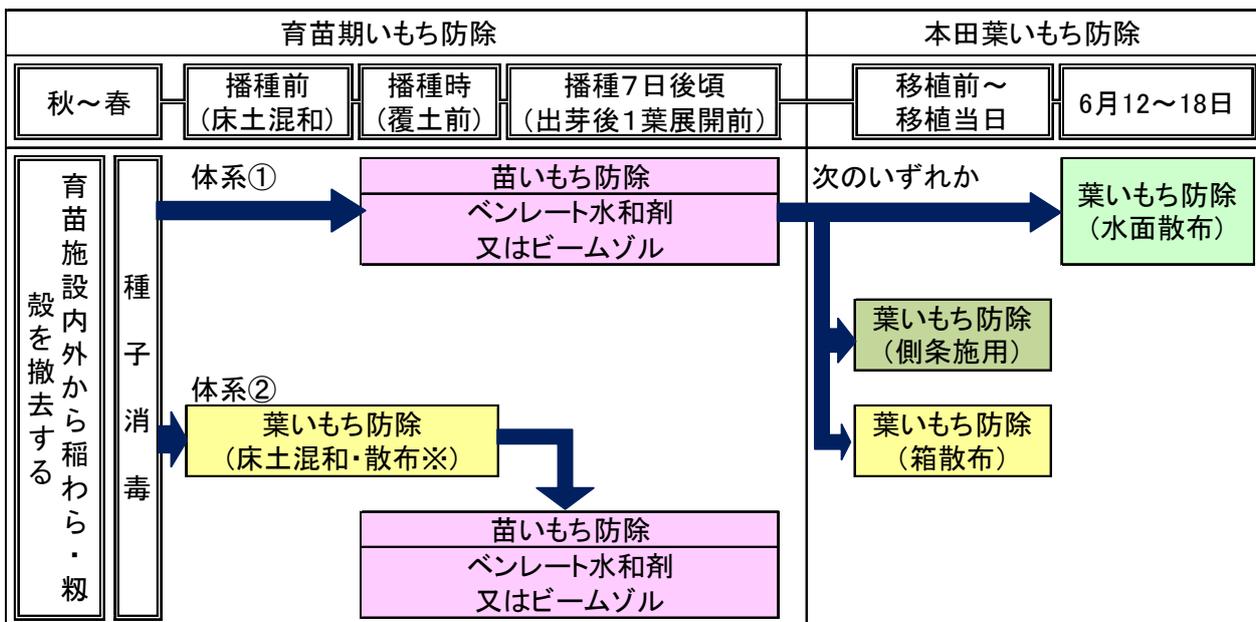
- ・ダコニール1000、ダコレート水和剤、ベンレート水和剤の播種時処理は、種子消毒にエコホープD Jまたはタフブロックを使用している場合はその防除効果を低下させるため、体系処理を行いません。

5 いもち病の防除対策

本田におけるいもち病の伝染源は、育苗施設から本田への発病・感染苗の持ち込みや、乾燥状態で冬を越した稲残渣（稲わら・籾殻）です。稲わら・籾殻を育苗施設から撤去し、育苗期のいもち防除を必ず行いましょう。

Qo i 剤（嵐剤等）は耐性菌が確認されているため、使用しないでください。

使用する剤については、JAまたは農業振興普及課までお問い合わせください。



- ・体系①：苗いもち防除→葉いもち防除
葉いもち防除を、水面施用剤、側条施用剤、箱施用剤のいずれかにより行う体系です。
- ・体系②：葉いもち防除（床土混和・散布）→苗いもち防除
葉いもち防除を、床土混和や播種時散布等の登録がある箱施用剤により行う体系です。
※葉いもち防除剤を播種時に散布する場合は、ベンレート水和剤との同時施用が可能。

◆飼料用米でもいもち病が発生しているほ場が見られます！

「秋田63号」等の飼料用米でもいもち病の発生が確認されています。あきたこまちと同等の防除を行いましょう。

◆令和4年も斑点米カメムシ類防除を徹底しましょう！！

昨年は斑点米カメムシ類の発生は全県的に多くなり、管内での斑点米の発生量も多くなっています。気象条件により、本年も多発する可能性があります。適切な防除を行い、斑点米カメムシ類被害の軽減に努めましょう！

問い合わせはJA、または農業振興普及課まで
HPは「美の国あきたネット 北秋田 コメ通信」で **検索**

～次回発行は4月上旬予定～

QRコードからも→

